

# パートの女性を輝かせるには

山田長司氏(ミニメイド・サービス株式会社 代表取締役社長)



1982年「日経ビジネス」という雑誌に、アメリカで家庭の家事を代行する会社が流行りという内容の記事が目に入り、すぐアメリカへ現場視察。日本でもアメリカ現地での家事サービスできると確信され、1983年に事

業をスタートされた。

「富裕層を中心にした高品質なサービスを提供する」事で、家事を火事と間違われて連想された方も多かった時代である。

富裕層では主婦が入り込んで家事代行をするということで、大切な貴重品を落としてしまったりした事もあるようで、エピソードは人の数だけあるようで、誠実に家族構成の細かい部分、かゆい所まで届くサービスを継続すると自然と指名が入り、継続ビジネスにつながっていると言う。

2010年には全国企業品質賞エクセレント賞を受賞され、また、家事サービス業界初のコンシェルジュ機能を兼ね備えた最高のサービスも提供されている。

女性のマネジメントをさりげなくこなされている経営者である。

# 東北大地震におけるNGO活動

大橋正明氏(国際協力NGOセンター【JANIC】 理事長)



3月11日に東北大地震が発生した。NGO代表として直ぐ現場に駆けつける。恵泉女学園大学教授でありながら、現場を見ずには語らない方である。

困っている人がいれば、どこにでも駆けつけて助けるのが国際協力NGOの姿である。現時点では、各NGO

の活動は、被災地の避難所、災害対策本部、社会福祉協議会、他のNPO等と情報収集し、協力しながらやっている。特に生活必需品である、オムツ、生理用品などが現実には不足しており、マスコミ情報と現場との乖離がある。

JANICは、被災地のニーズに迅速に対応する為に、必要な支援を必要とされる被災地に届ける調整役になっている。規模によって異なるが、支援物資とスタッフの食事や宿泊先をきちんと確保すること。その上で、震災発生後の翌日には現地に向かう機動力を見せた。これは常に、緊急支援に対する備えがあり、今までのノウハウが今回活用できた。支援活動を行っているNGOの数は30~40団体に増えたという。日本でも、このような活動が評価され、NPO、NGOが認知されつつある。迫力ある講話であった。

# 明日をよくする想像力

原田英治氏(英治出版株式会社 代表取締役)



アクセンチュアでの勤務を経て、家業の印刷会社などで学んだことも小さな会社を運営するうえで実務的でとても重要なことが多くあった。韓国に子会社「エイジ21」を設立し、韓国語での出版活動を行い、近い将来、英語

圏にも進出予定。将来的には、なるべく多くの言語での出版インフラをもつことで、世界が共有すべき情報や思想を世界に提供し、それをきっかけの一つでも多くの対話を望まれている。

また、ブックファンド事業はプロジェクトスタイル出版のことで、出版資金を外部調達することであり、原田社長の知恵と経験が織り込まれている。

自分の想像力を駆使し、誰かの夢を応援していく。目標達成に壁があれば、その壁を乗り越えるために、さらに想像力を駆使していく。想像力の限界が自分の限界になる。そうやって、誰かを応援し続ける中で、自分の限界を拡げていきたいと力説。

夢限大の人生。夢の大きさが、自分の大きくなる。「誰かの夢を応援すると、自分の夢が前進する」なんと素晴らしい言葉ではないでしょうか？

# いつも土壇場、常に修羅場、まさに正念場

倉橋泰氏(株式会社ぱど 代表取締役社長)



荏原製作所米国出張の際に、フリーペーパーに目が留まり、新規事業の第一号として社内ベンチャーを立ち上げるものの、大手企業の共同出資がまとまらなかった。当時の副社長が手を差し伸べてくれて、資金調達ができ、87年に会社設立となる。ところが、設立後は事業

は当然のことながら軌道に乗らず、焦りと不安で毎晩ぐっしょりと寝汗をかいた。ある時、シーツを見て血の汗かと思いきや驚いたという、「ピンクのシーツ」事件である。

その後、万策尽き、寺へ座禅をし、ひとつ決心をしたのである。「編集も営業も全て抱え込まず、社員を信じて、任せよう」と、自分は出来るだけ講演や取材を積極的に受けて、「ぱど」の知名度UPに全力投球した。その後は、会社は軌道回復し、大幅に売上げが伸び、ギネスブックで世界一のフリーペーパーとして認められたのである。今、ビジネスユーザーを中心に浸透しつつある電子書籍の台頭が、紙媒体の変容を余儀なくさせることになり危機感もある。まさに正念場である。

ジャスダック上場後も「情報を通じて、人と人、人と街をつなぎ、人も街も元気にする」というビジョンは揺らぐことはない。フランクなお人柄で、関西弁を駆使しながらの講話は聴き手を和ませた。